



TITLE:

京大広報 No. 344

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 344. 京大広報 1988, 344: 403-412

ISSUE DATE:

1988-01-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209335>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 344

京都大学広報委員会



湯川秀樹博士記念像の除幕式

—関連記事本文406ページ—

目 次

新年を迎えて	総長 西島 安則	404
新年名刺交換会		405
林 忠四郎名誉教授、西村秀雄名誉教授が		
日本学士院会員に選ばれる		405
部局長の交替等		406
自衛消防団員に感謝状贈呈		406
湯川秀樹博士記念像除幕式		406
＜紹介＞		
理学部地質学鉱物学教室での隕石の研究		406
＜保健コーナー＞		
健康回復力（健康調整能力）の信頼度		408

＜資料＞		
国立大学協会の要望書等		409
アメリカンフットボール部		
ライスボウルで2年連続優勝		411
計 報		411
日 誌		411
＜随想＞		
経済学の流れの中で		
名誉教授 青山 秀夫		412

新 年 を 迎 え て

総長 西 島 安 則

明けましておめでとうございます。

京都大学は、昨年6月18日、創立90周年を祝い、創立100周年に向け、世界のなかの学問の府として独自の学風をもって、更に人類の知的遺産の継承と発展に貢献すべく心に期したのであります。そして、京都大学90年代の最初の新年をここに迎えました。

この年の初めに本学体育会アメリカンフットボール部は国立競技場において昨年につづき2年連続、3度目（昭和58年度、61年度、62年度）の日本選手権を獲得するという快挙をなしとげてくれました。その凄まじい気迫、冷静な戦いぶり、そして何よりも純真な学生スポーツの真骨頂を発揮してくれたことに心より喝采を送りたいと思います。京都大学の今年の初頭を華々しく飾ってくれました。

昨年の暮には、本学理学部出身の利根川進博士がノーベル生理学・医学賞を受賞されました。誠におめでたいことであります。このノーベル賞を本学の関係者がたび重ねて受賞されましたことは本学の誇りとするところであります。

文学、歴史、芸術、思想など人文・社会科学の諸分野の共同研究体制をはじめ組織し、フランス学を中心に数多くの輝しい業績を挙げ、本学の学風の発展に貢献された名誉教授 桑原武夫先生は、文化勲章を受章されました。また、基礎医学、特に解剖学及び先天異常学の発展に貢献された名誉教授 西村秀雄先生と、宇宙論、星の進化、太陽系の起源など宇宙物理学の総合的な学問体系の形成に先導的役割を果たされた名誉教授 林忠四郎先生のお二人が新しく日本学士院会員に選ばれました。前総長・名誉教授 沢田敏男先生は、貯水ダムに関する御研究により、日本学士院賞を受賞されました。この他、昨年も数多くの本学の先生方が、学術への顕著な貢献により数々の国際的な賞を受け、榮譽に輝かれました。さらに、元総長・名誉教授 岡本道雄先生は、我が国の学術研究の推進と教育改革への永年の御尽力と御貢献によって昨年の秋、勲一等旭日大綬章をお受けになりました。

これらのおめでたい榮譽の数々は、京都大学の学問の府としての輝きであり、心よりお祝いを申し上げます。しかしながら、これら多くの顕彰も、京都大学の全体像を表現しうるものではありません。それは丁度、京都大学という素晴らしい多面的な大結晶に、時として一条の光がさしてその一つの面が燦然と輝くに似たものでありましょう。我々は、このような多面的な京都大学のすべてに限りない愛とそして誇りを持ちつつ、今後益々の発展を期すものであります。

現在、内に開き外に開いた京都大学として、人類社会の将来へ貢献する真の国際性をもった学問の府のあり方を追求しつつ、次々に具体的な構想が練られております。学部教育における一般教育と専門教育のあり方について、教養課程と専門課程とを一貫した形で、全学的な見直しが進められつつあります。また、新学部の形成や大学院教育の充実については、本学における教育と研究の一体性を重視し、学問の新しい展開と創造を目指して、真の学術の総合の理念に基づく検討がなされております。

本学の発展のエネルギーの源泉は、先達から守り継がれ受け継がれてきた自由な学風とあくまでも基礎を掘り下げる研究姿勢にあると信じております。新年にあたり、改めてこの学問の府に集い学ぶことのありがたさを思い、この年がさらに充実した意義ある年でありますよう祈念するものであります。

（本稿は、1月4日の新年名刺交換会での挨拶をまとめたものである。）

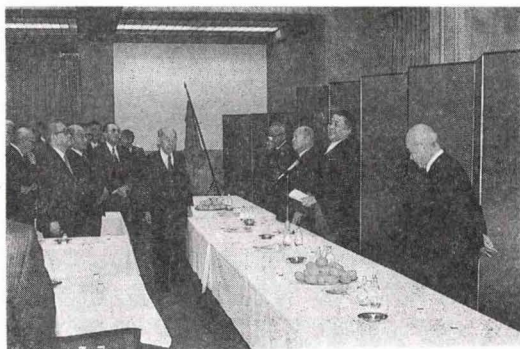


<大学の動き>

新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日（月）午前10時から京大会館において、西島安則総長はじめ平澤 興、奥田 東、沢田敏男歴代各総長、名誉教授、教職員約300名の出席を得て行われた。

初めに西島総長から新年の挨拶があり、次いで平澤元総長の発声による乾杯ののち歓談、10時45分、松田長三郎名誉教授の発声で万歳を三唱し散会した。



林 忠四郎名誉教授、西村秀雄名誉教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、林 忠四郎名誉教授及び西村秀雄名誉教授が日本学士院会員に選ばれた。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介する。

林 忠四郎名誉教授



林名誉教授は、大正9年、京都市に生れ、昭和15年、第三高等学校卒業、同17年、東京帝国大学理学部物理学科卒業後、同大学嘱託の身分で海軍に勤務した。同23年には京都大学理学部物理学科の湯川秀樹教授の研究室に入り、同24年、浪速大学（現大阪府立大学）助教授、同29年、本学理学部物理学第5講座の助教授、同年に理学博士を授与された。同32年、新設された核エネルギー学講座の教授となり、同59年、本学を退官し名誉教授の称号を受けた。この間、本学評議員、理学部長を歴任した。

同名誉教授は理論天体物理学の研究分野において顕著な業績をあげるとともに、研究歴の初期においては素粒子論、プラズマ物理学においても寄与した。さらに、同名誉教授は今日これらの分野で活躍している数多くの人材を育成した。

同名誉教授の業績は「星の進化と元素の起源」及び「太陽系形成論」の研究において特に高い国際的評価を受けている。恒星は星間ガスから形成され、太陽のような主系列星となり、その後赤色巨星の段階を経て、超新星などの終末に至る。同名誉教授は昭和20年代、30年代において、当時明らかにされていなかった主系列星の前及び後の段

階における星の構造と進化の理論を解明した。とりわけ、主系列星に至る原始星の進化における、今日、ハヤシ・フェイズと呼ばれている段階の存在を発見し、19世紀末以来信じられていた定説を覆えた功績は不朽のものである。また、ビッグバン宇宙での陽子・中性子比の理論を昭和50年に提出するなど、元素起源論にも多くの寄与をした。

昭和40年代末より今日にかけては、太陽系形成論の系統的研究に取り組み、原始太陽系星雲から惑星形成に至るシナリオを提出するとともに、地球科学などとの境界領域の育成にも寄与した。

同名誉教授の業績に対して昭和38年仁科記念賞、同41年朝日文化賞、同45年エディントン・メダル、同46年日本学士院賞恩賜賞、同57年に文化功労者として顕彰され、同61年文化勲章が授与された。（理学部）

西村秀雄名誉教授



西村名誉教授は京都府出身、昭和10年京都帝国大学医学部を卒業、同年同学部助手に任ぜられ、21年助教授を経て30年教授に昇任、51年停年により退官した。50年には医学部附属先天異常標本解析センター長を併任した。その間三十数年間にわたり解剖学を講じると共に、解剖学・発生学・奇形学についての多数の研究を発表し、斯界の発展に多大の貢献をした。また、今日学界で活躍している多くの人材を指導育成した。

同名誉教授は、ヒトの胎児医学に関する研究について、ヒトの正常及び異常発生の本態をかつて

ほとんど研究対象とされることのなかった妊娠初期の胎児に求めるとの着想を以て、主として人工流産によって得られた多数例のヒト初期胎児の標本蒐集を推進し、これを用いた系統的研究によって多くの貴重な新知見を得た。その主要な業績としては、初期胎児期には種々の重篤な奇形の頻度が新生児に比べて数倍ないし数十倍高いことを見出し多くの異常胎児が出生までに死滅してゆくとの推論を裏付けたこと、各種奇形の初期病理発生過程を詳細に解明したこと、外因の催奇形作用に対するヒト胎児の感受期を確立したこと、種々の先天異常と特定の環境要因との関連を明らかにしたことなどがある。また、実験動物を用いて種々の外因の胎児に及ぼす影響とその作用機序について広汎な研究を進め、1950年代にはニコチン、カフェイン、いくつかの抗腫瘍剤等の催奇形性を世界に先がけて見出した。これらの先駆的な業績は、ヒトならびにその他哺乳動物の発生学・奇形学の発展に大きく貢献している。

同名誉教授は、長年国内外の各種学会の重要な地位にあり、また WHO 専門会議専門委員、厚生省中央薬事審議会委員等を歴任した。更に、米国カリフォルニア大学、ニューヨーク大学の客員教授を歴任した他、1974年には米国国立衛生研究所 (NIH) において最も名誉あるフォガティ国際

センター高級研究員に任ぜられた。同名誉教授は昭和49年に紫綬褒章、昭和53年に日本学士院賞、昭和58年に勲二等瑞宝章を受けている。

(医学部)

部 局 長 の 交 替 等

経済学部長

池上 惇^{よしはる}経済学部長の任期満了に伴い、その後任として尾崎芳治^{よしはる}経済学部教授(経営学講座担当)が1月10日任命された。任期は昭和64年1月9日までである。

自衛消防団員に感謝状贈呈

12月18日(金)午後1時30分から、本部事務局長室において、自衛消防団員に対して総長からの感謝状が贈呈された。この日感謝状を受けた団員は、建本信雄(庶務部)、高木和則、竹下基幸、牧 良光(以上経理部)、飯田八郎(保健診療所)小原道夫(法学部)、田中和夫(理学部)、井山有三(農学部附属演習林)、落合正仁(化学研究所)の各氏である。

なお、12月24日午後1時30分から、自衛消防団と左京消防署合同による消防演習が法学部経済学部本館を中心に行われ、自衛消防団の日頃の訓練成果が披露された。

<部局の動き>

湯川秀樹博士記念像除幕式

12月11日(金)、基礎物理学研究所において、学内外の関係者約60名の出席のもと、湯川秀樹博士記念像除幕式が挙行された。除幕式は、大講演室で午前11時から始まり、西島和彦基礎物理学研究所長、西島安則総長、湯浅佑一湯川記念財団理事長の挨拶があった後、記念像が建立されている前庭で、総長、湯川スミ氏、早川幸男名古屋大学長、理事長、所長によって記念像の除幕が行われた。

引き続いて、湯川博士を偲ぶ懇親会がサロンで催され、湯川スミ氏、木村毅一名誉教授、伏見康治大阪大学・名古屋大学名誉教授の挨拶に続き、長谷川博一理学部長の発声で乾杯し、終始なごやかなうちに午後1時閉会した。

なお、この記念像(等身大ブロンズ製)は、湯川記念財団からの寄贈によるもので、博士の偉大な業績を顕彰する目的で博士ゆかりの基礎物理学研究所に建立されたものであり、製作者は山本恪二京都市立芸術大学名誉教授である。

(基礎物理学研究所)

<紹 介>

理学部地質学鉱物学教室での 隕石の研究

地球は、46億年前に原始太陽系星雲からできた後、今日まで長い間にわたって進化の歴史をくり

ひろげてきた。この地球の歴史を中心に研究を進めているのが地質学・鉱物学である。しかし、この長い間の進化のために、現在の地球には太陽系創成期の情報を保持している岩石はなくなってしまった。一方、隕石の多くは太陽系創成期の年齢を持っており、地球ができた太陽系創成期を知る

ための直接的な最高の情報源と考えられている。地質学鉱物学教室では鉱物学講座を中心に、この隕石の研究を通じて地球だけでなく太陽系創成期の研究にも取り組んでいる。

隕石は、太陽系の平均組成とほとんど同じ化学組成をもつコンドライトと呼ばれる未分化で始源的な隕石(写真1)と、分化した化学組成をもつ隕石に大別できる。分化した隕石は、地球のように火成作用によってつくられた岩石からなる微惑星のかけらであると考えられている。一方、始源的な隕石は原始太陽系の星雲から凝固した塵が集まってできた微惑星のかけらであると考えられている。したがって、始源的な隕石の研究は太陽系創成期の出来事を、分化した隕石はその後の惑星での出来事を研究するためにきわめて重要である。

隕石の研究は古くから行われてきたが、試料の数が極めて限られていた。1970年代に、南極で日本隊が大量の隕石を発見し、現在日本は保有数で世界一となった。10年ほど前から、これらの隕石が研究用に配布されるようになったため、隕石の研究が世界的に広く行われるようになった。同じ頃、地質学鉱物学教室では、当時世界最先端の分析装置付高分解能電子顕微鏡を設置し、造岩鉱物の研究を進めていた。この装置を、世界に先駆けて隕石の研究に応用することで、当教室の隕石研究が始まったのである。

未分化の隕石は、微小な鉱物の集合体である。また、多くの鉱物は生成したときの条件(温度・圧力・酸化状態など)や、その後の条件の変化に対応する複雑な微細組織を示す。したがって、分析装置付高分解能電子顕微鏡で、原子オーダーで鉱物の構造の乱れや化学組成の不均質性を明らかにし、それらの形成過程の解明をすることによ

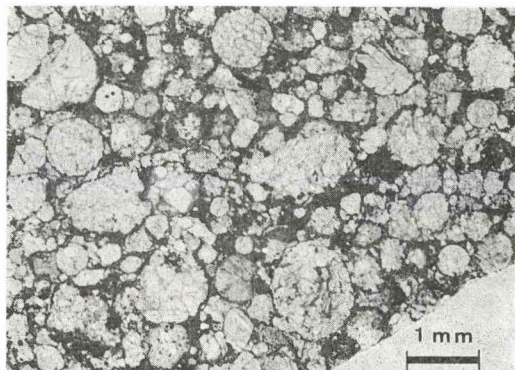


写真1 未分化な隕石(コンドライト)の光学顕微鏡写真。コンドリュールとよばれる丸い塊を微細な鉱物を取り囲んでいるのが特徴で、太陽系創成期の生き証人である。

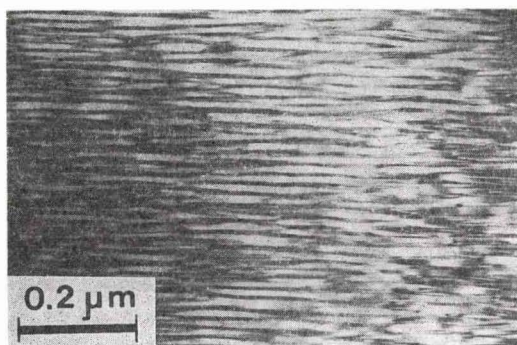


写真2 写真1のコンドリュール中の鉱物(輝石)に見られる分相組織の透過型電子顕微鏡写真。白いバンドはMgに、黒いバンドはCaに富む。この組織から、コンドリュールの冷却速度に関する情報が得られる。

て、隕石の生成過程を明らかにすることが出来るようになる。この際に、地球構成物質についてのこれまでの研究が非常に参考になるのである。

私達の研究の成果の一部を紹介する。従来、未分化な隕石は、一度惑星を形成した後、その惑星内で熱変成をうけて種々の組織を示すに至ったとされてきた。この熱変成の弱い隕石から強いものまで、鉱物の微細な組織(写真2)を系統的に研究した結果、このような岩石組織は、惑星に集積後に起こったのではなく、集積時に起こったことが明かとなった。未分化な隕石の母天体では、集積後に熱変成を受けなかったということは、惑星の進化を考える上できわめて重要な情報である。さらに、未分化な隕石をつくった原材料に関しても、隕石内の構成鉱物に残されている情報を捜し出すことにより、原始太陽系星雲ガスから凝縮した塵と、微惑星などを形成していた岩石から由来した鉱物との2種類の物質があったと推定できるようになった。星雲ガスから凝縮した塵は、隕石ができる以前のさらに始源的な情報をもっている可能性があり、凝縮作用に関する実験的研究も始めつつある。また、分化した隕石についても、未分化な隕石を出発物質にして、火成作用の再現実験を行い、現実の分化した隕石を実験室内で作り出すことにも最近成功した。

今後は、さらに、このような研究を進めることにより、太陽系の創成期の出来事、とくに地球を含む惑星の成因についてのより多くの情報を得ることを期待している。なお、このような大きなプロジェクトに発展させていくには、十分な設備や関係する分野の研究者との国際的な共同研究がますます必要となろう。

(理学部)

保健コーナー

健康回復力（健康調整能力）の信頼度

健康回復力とは、失った健康状態を取り戻す能力のことである。医薬等の力を借りずに自分自身の気力、体力のみに拠って回復できる能力があるとするれば、それは自然治癒力である。病的状態へ近付いてはいるが、病気であると決め兼ねるような状態からの回復力は健康調整能力とも言えよう。生きていく為に、常に健康状態を保ち続けようとする（恒常性保持）機能は、基本的には中枢神経系の支配を受けながら、自律神経系、内分泌系、免疫系、その他の機能系の働きに負っている。しかも、これ等の機能は、大部分が無意識的、反射的に営まれている。勿論、この機能を正常に発揮させる為には、健全な精神状態と共に栄養、休息等に配慮する必要がある。過度の不安感を抱き続けると、恒常性保持機能に悪影響を及ぼすことがある。

支障なく毎日働くことができるという社会的健康状態における健康調整能力は、睡眠による疲労の回復として感じることができる。疲労から回復できる睡眠の深さと時間に関しては、各自に適したパターンを経験的に自覚している筈である。

運動、スポーツ等による筋肉疲労に対して、運動を止めて十分な休息をとることが、疲労回復には最善の方法と思いがちであるが、必ずしもそうとは限らない。かなりの長距離走、行程の長いハイキングの後に休息をとる場合を例に挙げると、地面に座るか寝そべてしまえば、最早その後、走ったり歩く気がおきないことが多い。このような場合、疲労している筋肉への刺激として、休息時間の間に短時間の緩やかな走行、歩行等の脚力を使う運動を加えることによって、筋肉疲労をより早く回復させることができる。休息を兼ねた一種のウォーミング・アップである。休む為の休息ではなくて、再び活動を始める為の休息と理解されている。健康調整能力の効率を上げる為には、それなりの方策も必要である。

血圧の調整機能は、精神機能、自律神経、ホルモン等の連携によって身体内外から受ける刺激に反応して、合目的的に作動している。自動車のプロ・ドライバーの実地検査によれば、平素の血圧が最高血圧 120 ミリ・メートル・水銀柱高（以下 mmHg と略す）、最低血圧 80 mmHg 前後の正常範囲内にある人でも、高速自動車道で前走車を追越す時には、最高血圧は 200 mmHg 以上の異

常高値を示していることが多い。精神的緊張に反応して、自律神経の一つである交感神経系、ホルモン等が何時起きるかもしれない異常状態に速やかに対応させるべく、全身を不随意的にその為の準備状態にさせていることの一つの表現である。平常運動に戻り緊張が解ければ、10～20分後の血圧は正常範囲に落ち着くように再び調整力が働く。精神的緊張の少ない起床後の安静時血圧を、医学的に基本血圧としている理由がここにある。

肝臓は生命維持に欠くべからざる機能を備えた臓器であるが、常にエンジン全開状態で活動しているのではなく、予備力（余裕）を残して役目を果たしている。この予備力が健康調整能力である。アルコールは、摂取量が適量であれば有効な生理作用を示すが量を過ぎれば健康を阻害する。肝臓は摂取アルコールの大部分を分解して、体外に送り出す解毒機能も備えている。常飲者では、特別な酵素の参加を促して分解スピードを速めるように調整機能が動員される。平素の酔覚め時間が過ぎても、意識がすっきりしないことを自覚するようになれば、自身の肝臓の健康調整能力が低下していることを知るべき時期であり、病的状態か、それに近い状態としての本格的な対応が必要であろう。他の臓器にも同様な予備力があり、一定範囲内の刺激に応じて健康調整に与かり、それらの総合力によって平素は健康が保たれていることになる。

免疫力に関しても同様な機序がある。ビールス感染症の治療に際して、病因ビールスに有効なワクチン、ビールスを絶滅できる薬剤が無くても、解熱、鎮痛、消炎剤等の対症療法剤の力を借れば、自己の免疫力によって回復できることが多い。病因を完全に除去する根治療法を除いて、一般的な疾病治療法として薬剤を使用する場合も、個人の持っている健康回復力に薬効力を加えてその目的達成を期待しているのである。非常に稀なことであるが、癌の自然治癒もあるとされている。

自身の健康回復力（健康調整能力）の限界を知ることは不可能であろう。この回復力は種々の機能の総合力に拠るものであり、精神状態にも大きく係わるものでもある。各自の健康への回復力は健康時の経験から、その程度を概略ながらも判断できる筈のものである。過信することなく冷静に信頼して、日常生活を送るに越したことはない。無理を重ねたり加齢等によって、回復力が減弱していることを知る機会があれば、専門医に助言を

求めて各自の健康回復力を高めるように努めることは、健康回復力（健康調整能力）に対する信頼

度を保つ為の有効な手段ではあるまいか。

（保健管理センター 小川隆三）

<資 料>

国立大学協会の要望書等

国立大学の授業料の改定に関する要望書及び 技術職員問題についての報告書

国立大学協会第81回総会において、次の要望書等が決議され、それぞれ関係方面に提出された。

国立大学の授業料の改定について（要望）

（大蔵大臣，文部大臣宛提出）

再び技術職員問題について

要望書等は以下のとおりである。

昭和62年12月 4日

国立大学協会会長

森 亘

国立大学の授業料の改定について（要望）

政府におかれては、常日頃から財政再建と行政・教育改革に真摯に取り組まれていることに対し、深く敬意を表するものであります。然し乍ら明年度の予算編成に当たり、国立大学の授業料を大幅に増額改定する意図があると伝えられていることについては、国立大学協会として、強い危惧の念を抱いていることを表明せざるを得ません。

国立大学の授業料については、既に繰り返し要望しておりますように、教育の機会均等の原則を実現するためできるだけ低廉であることが望ましく、また国と社会を最大の受益者とする国立大学の教育にとって単純な受益者負担の原則の適用やコスト主義に基づく専門分野間格差の導入などは到底認められないところであります。更に、財政収入増の観点から授業料、入学金の隔年ごとの改定を定着させることについても、かねてから、遺憾の意を表しているところであります。

また、近年諸外国からの留学生受け入れの増加の施策がとられ、その数は毎年着実に多くなっており、この多数を占める私費留学生に対する授業料の改定は、今後の留学生の受入れに大きな影響を及ぼすことになります。

政府におかれては、われわれの意のあるところを賢察の上、国立大学の授業料の取扱いについて、十分慎重を期せられますようここに重ねて強く要望いたします。

技術職員問題について

このことについては、京大広報No.336（1987. 7. 10）に掲載したところであるが、その後、昭和62年11月10日付けで国立大学協会第4常置委員会から「再び技術職員問題について」の報告書が出されたのでここに掲載する。

再び技術職員問題について

昭和62年11月10日

国立大学協会第4常置委員会

当委員会は、国立大学の教育研究支援職員としての技術職員の取扱いについて、先の昭和61年3月13日付の文部省の「技術職員待遇改善検討委員会における検討状況のまとめ」いわゆる「第2次案」を中心にして、種々検討を重ね、さる昭和61年秋の国大協総会には「技術職員待遇改善検討会第2次案に対する見解」を提出し、又同62年の春の同総会には「技術職員問題について」を報告し、その中で「打開策」と「諸施策」を示して各大学における検討方についても要請したところである。

今回は、前回総会において「打開策」として提案したC案の考え方「専門行政職を導入することを目指しつつ、それに向けての中間的段階として、まず、現行の行政職俸給表体系の中で職務内容等諸条件の整理を行ない、官職および組織を整えて処遇面の改善を図る」とともに「可及的速やかに専門行政職へ移行出来る体制の構築を急ぐ」方策を取ることにし、「組織化のモデルについては第1常置委員会との合同小委員会を中心に、いくつかの素案の作成を進めている」その後の検討状況を報告することとする。

a. 組織化の基本となる考え方

各大学は、それぞれ大学の歴史（発展過程）や規模や考え方（主体性）等を異にしており、全大学の組織を画一的に決めることが、かえって非現実的なものを求める結果にもなりかねないが、一面大学間の均衡を失わないことの必要性や職員の処遇にかかわることでもあるので基本的な部分は統一して置くことが肝要と考える。従って各大学における現実的な検討や対応も当委員会が示す方向にそったものになることが望ましい。

b. 組織の単位

組織がその機能を十分に果たすためには、それぞれに適正な規模が必要であることは当然のことであるが、同時にその組織を作る目的にも充分配慮したものが求められる。何故ならこれらの組織は「可及的速やかに本来の目的である専門行政職へ移行出来る体制の構築を急ぐ」ためのものとして考えるべきものであるからである。

しかしながら、教官を含む職員における組織化の必要性の理解、人材の手持ちや現在の財政条件等を考慮した場合即時的な対応が必ずしも充分な現状でないのも実体である。そこで当委員会としては、部課（室）制を持つ本来の組織を将来に目指しつつ、当面の条件下で実現出来るものから漸進的に実施し、それを積み上げて行く立場に立つことの方が得策であると判断したことを特に述べておきたい。そこで組織の単位として主として次の三つの場合、あるいは複合の組合せを想定する。

(1) 全学を単位とするもの

単科大学あるいは自然系大学等で比較的技術職員の数も少なく、全学一本でのまとまりが容易に得られる大学の場合

(2) 大学の地区を単位とするもの

大学のキャンパス単位等でまとまりが容易に得られる大学の場合

(3) 各部局を単位とするもの

総合大学等での一般的な組織単位と考えられるもので、学部と附属施設を包括することも立地条件によっては可能となろう。

c. 組織化の方法

本組織化は、本来教育研究支援体制の確立を目指すものであるから当然に現実の教育研究の遂行により効果をもたらすものでなければならない。しかしながら教室系技術職員は独自の組織を持たずに教官と一体となって職務を行うという形態を永年にわたって続けて来ており、今ただちに専門職種群別に組織化を図るには教職員間の理解を深めることをも含めて種々の解決すべき課題を有している。

又、現実の教育研究遂行上に支障を与えることなく、この組織化を導入することも大事であることを考慮すると、次のような類型区分方法と組織化の行程になろう。

(1) 業務内容により組織化する方法

例えば分析測定集団、情報処理集団等教育研究体制とは必ずしも対応しないので、技官の専門職種に着目して組織化するもので、これは他から見て専門職集団としての理解は得やすい。しかしながら、従来からの学部・学科・講座等に教

室技官を配置する体制をそのままにしてのこの組織化では、職場管理や人事管理責任の所在が不明確となる等の問題がある。（所属と業務の複合管理）

(2) 教育研究体制（組織）に対応した方法

例えば、学部・学科あるいは複数の学科を系統（電気・機械等）でまとめる方法で現在の教育研究組織に順応した組織化であり、専門職集団としての性格付けにやや不安を残すがまとめの作業に困難は少ない。

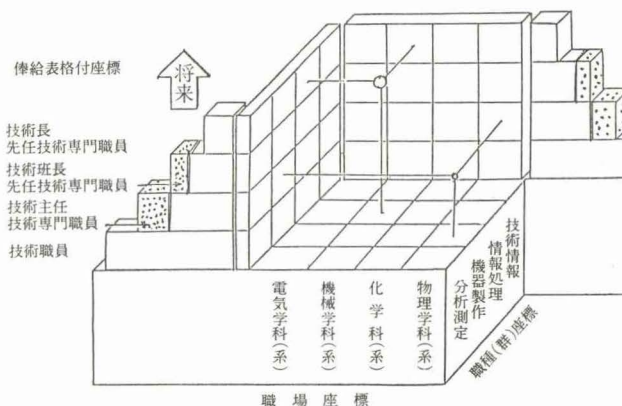
そこで当面の組織として(2)を導入し、職員の職務（職種）を特定することを進め、将来の専門行政職適用体系組織として(1)を構想して行くこともその行程として考えられる。

d. 組織における官職の設置と配置基準

大学における教育研究支援体制の在り方としてはそれぞれの規模に応じて、あるいは国立共同利用の研究所のいくつかがそうであるように技術部体制を概算要求により、実施することも当然考えられることであるし、むしろ事情が許すならばそれが望ましいことである。しかし先にも述べたように諸条件を一度にクリアすることが困難な場合にはそのステップとしてまず次の当面の措置を構ずることが考えられる。その一つの例として前記b(3)の場合において当面考えられる組織モデルを掲げることとする。なお同記bの(1)および(2)にあってはそれ以上の部課（室）等を有する組織を構築することがむしろ、望ましいという観点に立っている。

次の官職を設定し、一組織当りの配置基準は教室系技術職員の在職数を概ね次のとおりとする。

技術主任……技術職員3人以上に1人
技術班長……技術職員7人以上に1人
技 術 長……技術職員15人以上に1人
技術専門職員（職務の特殊性に基づく業務を専門に行う官職）——技術主任相当の官職



前任技術専門職員（技術専門職員で極めて高度な業務を行う官職）——技術班長又は技術長相当の官職

e. 専門行政職との関係

専門行政職はその職務資格の標準を大卒Ⅱ種としていことから、国立大学の教室系技術職員についても同様の実績がないと適用は困難と云わざるを得ない。そこで、上記による官職及び組織の整理をした後大卒Ⅱ種およびそれに準ずる職員で構成される組織と認定されたものについては専門行政職へ移行されることとなろう。ここで留意すべきは組織化なり整理された実態によって移行の

可否の判断がなされることとなるということである。

以上当委員会は技術職員の待遇改善の検討から出発し、「教育支援体制の抜本的見直しと強化」（臨教審第2次答申）のためにも、組織体制の改善や研修等による人材の育成計画が必要との判断に立つにいたった。そして今後も第1常置委員会との合同検討体制をはかる等審議を重ねて行く所存であるが、財政的な条件等の厳しさの中で打開策をはじめとする諸施策が結実するためには文部省をはじめ関係者のなお一層の御理解と御協力に特に期待したいことを添えて報告とする。

アメリカンフットボール部 ライスボウルで2年連続優勝

12月13日（日）、第42回（昭和62年度）甲子園ボウル（東西大学王座決定戦）が甲子園球場に約3万7千人の観衆を集めて行われた。

この結果、本学アメリカンフットボール部は、関東学生リーグ優勝の日本大学チームを41-17で破り、2年連続3度目の学生王座についた。

さらに、本年1月3日（日）、東京国立競技場

に約4万8千人の観衆を集めて行われた第5回（昭和62年度）全日本選手権大会（ライスボウル）においても、社会人1位のレナウンチームを42-8で破り、2年連続3度目の日本一に輝いた。

なお、甲子園ボウルでは、年間最優秀選手に贈られるミルズ杯に東海辰弥（農）、最優秀選手に福島伸一郎（工）が、また、全日本選手権大会では、最優秀選手に東海辰弥が選ばれた。

（学生部）

計 報

藤村吉之助（本学名誉教授・農学博士）

12月19日逝去、89歳。昭和3年本学農学部卒業。21年本学食糧科学研究所教授就任、36年退官。その間食糧科学研究所長（30年～36年）併任。48年勲三等旭日中綬章。専門は食糧化学。

澤村 宏（本学名誉教授・工学博士）

12月24日逝去、92歳。大正9年本学工学部卒業。昭和

8年本学工学部教授就任、33年退官。その間評議員（22年～24年）、工学部長（24年～26年）を歴任。42年勲二等旭日重光章、53年日本学士院会員。専門は鉄冶金学。

木庄 一夫（本学名誉教授・医学博士）

12月27日逝去、74歳。昭和14年本学医学部卒業。40年本学医学部教授就任、52年本学より関西医科大学長に就任。52年紫綬褒章。専門は消化器外科学。

日 誌

（1987年12月1日～12月31日）

12月4日 ポーランド人民共和国 Jagiellonian 大学
Aleksander Koj 学長ほか1名来学、総長
と懇談
8日 創立七十周年記念後援会助成金選考委員会
9日 外国人学者・留学生懇親会
11日 防火委員会

15日 環境保全委員会
16日 国際交流委員会
〃 国際交流会館委員会
22日 評議会
24日 安全委員会

